

今年も春のお彼岸ひがんの季節がやってまいりました。

春しゅんぶん分ぶんの日を挟んで前後三日間の春のお彼岸ひがん、この一週間のうちに、先祖供養やお墓参りをするのが、日本の仏教行事として定着しています。春分しゅんぶんは、二十四節気にじゅうしせつきのひとつで、太陽の中心が春分点しゅんぶんてんという南から北へ向かって赤道を通過する点に来たときのことをいい、それにより、昼と夜の長さがほぼ等しくなる日です。

お彼岸の行事は、インドや中国では行われていません。日本独自の行事です。

「彼岸ひがん」という言葉自体は仏教語で、簡単にいいますと、仏様の住む世界を「彼岸ひがん」、私たち人が住む世界を「此岸しがん」といいます。

では、春分しゅんぶん・秋分しゅうぶんをなぜ「ひがん」というのかといいますと、農作物が豊作になるようにと、太陽を崇拜する儀式から、「日ひ」に「願ねが」う「日願ひがん」になったという説や、渡り鳥、特に雁がんが北へ飛び立つのが春分、北から飛来するのが秋分と移動する時期であるために、「飛と」ぶ「雁がん」と書いて「飛雁ひがん」という説などがあるようです。

古来の日本人の自然を崇拜する心が、仏教の言葉と結びついて「彼岸ひがん」と呼ばれるようになったものと思われます。

生きている私たちが亡き人に対してできることに、「供養」があります。

お彼岸は、思い出深い身内みうちの方や友人・知人など、亡くなった方々をはじめ、お目にかかったことのないご先祖さま方への供養の意味合いが強くてあります。地方によって行事の内容は異なりますが、お寺にお参りをする、僧侶の読経どきょうを頂くとうば、塔婆たすさを携えお墓参りをして亡き人のために祈るといふ供養の行いであるのです。

供養にはさまざまありますが、特に塔婆供養とうばに関して、宗教人類学者・駒澤大学名誉教授の佐々木宏幹先生ささきこうかんによりますと、

「具体的には塔婆は、寺で行われる儀礼によって「仏法僧」の功德くどくの力を帯びているものであるから、墓に存在する死者・先祖を喜ばせ、安定させるとの認識を人々は共有している」と述べられています。

亡き人やご先祖さまに思いをはせる良い機会のひとつがこのお彼岸です。

まごころから亡き人やご先祖さまに向き合い、気持ちを届ける供養をしたいものです。